

令和6年度 校内研究の概要

研究主任

1 研究主題と研究の全体構想

研究主題

**主体的・対話的で深い学びを通して、
自ら考え、行動できる力を身に付けた子どもの育成**

【めざす教師の姿】

- ・子どもたちが自発的に話したくなるような指導を実現した姿
- ・子どもたちが学習に対する必要感をもたせることを意識した指導を実現した姿
- ・子どもたちがチャレンジできる環境整備・教材研究の実践する姿
- ・子どもたちを主体とした授業を実現するための授業力の向上に努める姿
- ・子どもたちを主体とした授業を実現し、ファシリテーターとしての役割を果たす姿

【めざす子どもの姿】

- ・「なぜその学習が必要なのか」「その学習を通してどんな力を身に付けたいのか」を自覚し、主体的に学習に取り組むことのできる子
- ・見通しをもって学習に取り組み、目的に応じて自らの学びを調整しながら学習を進めることができる子
- ・自らの学習を振り返ることで、自分に付いた力を実感し、今後の学習へといかそうとすることができる子
- ・相手の思いを踏まえながら自分の考えをもち、その考えを相手に示しながら、自分の考えを確認したり、さらに相手の考えを知ろうとしたりできる子
- ・自分とは異なる考えを踏まえた上で、より良い考えを再構築することができる子

【低学年】

- ・基礎学力を身に付けた子
- ・見通しをもち、進んで学習に取り組むことのできる子
- ・自らの学習を振り返ることで、自分に付いた力を実感できる子
- ・自分の考えをもち、相手の考えとの共通点に気付くことのできる子

【中学年】

- ・自分なりの学習課題を設定し、自らの学習計画を立てることのできる子
- ・毎回の授業で解決することを考え、自らの学習を調整できる子
- ・自らの学習を振り返ることで、自分に付いた力を実感し、今後の学習へといかそうとすることができる子
- ・グループ活動において、自らの意思を伝え、相手の意見を取り入れて、どう感じたかを伝えられる子

【高学年】

- ・「なぜその学習が必要なのか」「その学習を通してどんな力を身に付けたいのか」を自覚し、主体的に学習に取り組むことができる子
- ・見通しをもって学習に取り組み、目的に応じて自らの学びを調整しながら学習を進めることができる子
- ・自らの学習を振り返ることで、自分に付いた力を実感し、今後の学習へといかそうとすることができる子
- ・相手の思いを踏まえながら自分の考えをもち、その考えを相手に示しながら、自分の考えを確認したり、さらに相手の考えを知ろうとしたりできる子
- ・自分とは異なる考えを踏まえた上で、より良い考えを再構築することができる子

令和4年度

- 視点1 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための単元構成の工夫
- 視点2 「子ども主体の授業」を実現するための授業改善

令和5年度

- 視点1 自ら考え、行動できる力を身に付けさせるための指導の工夫
- 視点2 子ども主体の探求的な学びを実現するための授業改善

令和6年度

- 視点1 自ら考え、行動できる力を身に付けさせるための指導の工夫
- 視点2 子ども主体の探求的な学びを実現するための授業改善

2 主題設定の理由

《学校教育目標》 創造性豊かな心とたくましい心を持ったあすみっ子の育成

《目指す子ども像》

- ・ やりぬく子
- ・ やさしい思いやりのある子
- ・ 困難に立ち向かう子
- ・ じっくり考える子

(1) 本校学校教育目標から

本校では、学校教育目標として、「創造性豊かな心とたくましい心をもったあすみっ子の育成」を掲げている。変化の激しい現代社会を生き抜いていくためには、生涯にわたって学び続けることが求められており、小学校における義務教育は、その基盤となる役割がある。

学校教育目標を受けた目指す子ども像として、「やりぬく子」「やさしい思いやりのある子」「困難に立ち向かう子」「じっくり考える子」を設定している。国語科の学習を中心とし、各教科の学習を通して、自ら考え、行動できる力を身に付けた子どもを育成し、一人一人の学力に応じた個別最適な学び・協働的な学びを実現するための授業改善を行うことは学校教育目標の具現化の一端を担うことができると考える。

(2) 時代の要請から

令和2年度より全面実施されている小学校学習指導要領（平成29年告示）において、これからの社会は生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、予測が困難な時代が到来することが予想されている。そして、中央教育審議会答申では、「この予測困難な時代においては、従来のやり方や考え方を踏襲するだけでは変化についていくことは難しい。つまり、社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けることが重要である。」と述べられている。

本校の教育においてもこれらの時代からの要請を踏まえ、課題に主体的に取り組み、対話的な学びを通して深い学びを実現することのできる授業を実現することで、これから到来するであろう予測困難な時代を強く生き抜いていくために、自ら考え、行動できる子どもを育成していくことが必要だと考え、主題設定を行った。

(3) 児童の実態から

本校では、「自ら考え、行動する力」を構成する4つの要素として、「考えの形成」「考えをよりよくすること」「課題解決能力」「実行力」を設定し、実践を通してこれらの力を育成することを目指した。全校に実施した実態調査によると、7月の調査に比べて11月の調査では全ての項目において向上が見られており、昨年度に行った研究・実践に一定の効果があったと考えられる。しかし、「自ら考え、行動する力」の定着において学年間における差が見られることや、「自ら考え、行動する力」を身に付けた児童の育成が学校全体として達成されたとは言い難い状況である。そこで、昨年度の実践の成果と課題を踏まえ、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業を実現することで、「自ら考え、行動する力」を身に付けることのできた児童をさらに増やしていく必要があると考える。

（４）昨年度の研究から

本校では昨年度、「主体的・対話的な学びを通して、自ら考え、行動できる力を身に付けた子どもの育成」を研究主題として授業改善に取り組んできた。その成果として、児童に「自ら考え、行動する力」を身に付けさせるためには、児童が学習に対する必要感をもち、探求したいと思える学習課題を設定する必要があることが分かった。そのためには、教師が敷いたレールの上を歩かせるだけの学習ではなく、児童が自分自身の力で学びを調整し、新たな資質・能力を獲得する経験を積ませる必要がある。研究を通して、方法は明らかになってきたが、それを日々の学習や学校生活の中でどう実現していくのかが本校の課題として残った。そこで本年度は、「思い」だけでなく「実行」までもっていく学年・学級経営や、授業スタイルの確立を図っていく必要があると考え、本主題を設定した。

3 研究主題について

(1) 本校でとらえる「主体的・対話的で深い学び」

「主体的・対話的で深い学び」とは「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」この3つの学びが関わり合い、1つになった学びのことである。この3つの学びはそれぞれ独立し得るが、互いに関連し、つながりあっている学びであると考ええる。なぜなら「対話的な学び」は子どもが学習に主体的に取り組んでいる場面でしか生まれないからである。「深い学び」も「主体的な学び」と「対話的な学び」を通して到達するものであり、その「深い学び」を子どもが振り返り、教師が適切に評価することで、子どもの次の学習への主体性が生まれてくると考えられる。そこで本校では、「主体的・対話的で深い学び」を学習における1つのまとまりとしてとらえる。以下はその1つ1つの要素について更に詳しく述べていく。

中教審の答申において、「主体的な学び」は、「子ども自身が目的や必要性を意識して取り組める学習」と明記されている。その学習を目指すには、まず何のためにその教材を学ぶのかを子ども自身に捉えさせ、その目的を達成するために何を学んでいく必要があるか見通しをもって学習に取り組んでいく。そして、振り返りを行うことで、学習を通してどんな力が身に付いたかを実感させ、その力を使って次の学習や他の教科の学習に対する必要感を高めることが重要になる。この一連の流れを繰り返すことによって、学習に対する子どもの主体性がより高まっていくと考える。よって、本校でとらえる主体的な学びとは、「子どもが学習に対する必要感をもち、当該学習における見方・考え方と自分を関わらせながら見通しをもって学習に取り組み、振り返ることで自分に付いた力を実感し、次の学習へといかにしていく学び」ととらえる。

また、子どもが主体的に学習に取り組むことで、自分の考えが十分なのか不十分なのかという不安や、もっと他の人の感じ方や考え方を知りたいという思いが生まれてくると考えられる。それらを解決するために「対話的な学び」が必要となってくるだろう。中教審の答申では、対話の相手として「子ども同士、子どもと教職員、子どもと地域の人、子どもと本の作者、子どもと作品」などの例を挙げている。このような相手と対話する際に必要となってくるのは、「自分の考えをもって対話すること」「話し手や聞き手の思いを、言葉を通じて受け取ること」だと考える。そこで、本校でとらえる「対話的な学び」とは、「相手の思いを踏まえながら自分の考えをもち、その自分の考えを相手に示しながら、自分の考えを確認したり、さらに相手の考えを知ろうとしたりする学び」ととらえる。

そして、ここまで述べてきた「主体的・対話的な学び」が展開されたとしても、それだけでは単なる生き生きとした話し合いで終わってしまう可能性がある。その先の学習につなげるためには、より意味のある「深い学び」へと導いていく必要がある。「深い学び」とは、それぞれの子どもの考えの共有により、その相違点や共通点を捉え、それを基に自信の考えを再考することによって生まれてくるものであると考える。よって、本校でとらえる「深い学び」とは、「主体的・対話的な学習を通して、自分とは異なる考えを踏まえた上でよりよい考えを再構築する学び」ととらえる。

(2) 本校でとらえる「自ら考え、行動できる力」

児童が自ら行動を起こすためには、その基盤となる資質・能力として、基礎的・基本的な知識・技能を習得し、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を育成し、確かな学力を身に付けさせる必要がある。その実現のために必要な資質・能力として、「考えを形成する力」「考えをよりよくする力」「課題を解決す

る力」「考えたことを実行する力」と設定した。それらを身に付けるための活動を振り返ることで、自身の失敗したことを肯定的に捉え、次の活動へとつなげていくことや、自身の成長を実感し、自己肯定感を高めていく必要がある。また、本校職員による昨年度の実践の振り返りから出てきた、児童に身に付けさせたい資質・能力を育成することも、「自ら考え、行動できる力」を育成することにつながると考える。

本校児童に身に付けさせたい資質・能力

《育てたい資質・能力》（低学年）		
【知・技】 ・幅の広い知識 ・言葉の使い方、使い分けの仕方の正しい理解 ・平仮名や片仮名を正しく使う力 ・ギガタブを使うことへの慣れ ・足し算や引き算の基礎的な計算をする力 ・自分の考えを表現する語彙力	【思・判・表】 ・揉め事を自分たちだけで解決しようとする力 ・物語から様子を想像する力 ・他者の考えに触れて自分の考えをもつ力 ・1対1の会話の力 ・グループ内の会話能力 ・認め合う・他者理解 ・良し悪しを判断する力 ・多様な表現方法	【主体性】 ・自分で考えて行動する力 ・最後までやり抜く力（諦めない） ・失敗を恐れない ・できた、できないではないチャレンジする姿勢 ・他者との関わり合い ・挨拶、感謝の気持ちを言葉で伝える ・自己理解力 ・根気
《育てたい資質・能力》（中学年）		
【知・技】 ・学習した知識を生かそうとする力 ・自ら興味関心をもつ力 ・基礎学力（既習事項） ・練習問題に繰り返し取り組み、継続する力 ・宿題など真面目にコツコツと積み重ねる力 ・下敷きの使用、文字の丁寧さ	【思・判・表】 ・自らの課題に対して交流をすることで、より表現したり、考えたり、判断したりする力 ・課題に対して自分の力で解決を図ろうとする力 ・ICT機器を活用して、自分の考えを表現できる力	【主体性】 ・「いいんだよ」と互いに思える関係を作る力 ・「失敗してもよい」という環境を作り上げていこうとする力 ・協力し合う、助け合う力 ・自己肯定感、協働意識 ・自分で探求し、自分で解決しようとする態度 ・忘れ物をしないよう準備し、忘れたときの自己解決能力
《育てたい資質・能力》（高学年）		
【知・技】 ・学年で習う漢字の定着 ・基本的な計算能力 ・語彙 ・体力 ・自ら勉強する力	【思・判・表】 ・質問力 ・自分の言葉で伝え合う力 ・個で考察する力 ・自分で考えて解決する力 ・深く思考する態度 ・協働・考動 ・複数の選択肢の中から根拠をもって決断する力	【主体性】 ・メタ認知する力 ・鵜呑みにしない素直さ ・目標をもって最後まで粘り強く努力する力 ・基本的な生活習慣・挨拶 ・思いやり

(3) 本校でとらえる「子ども主体の探求的な学び」

「子ども主体の探求的な学び」とは、教師の呼びかけから活動が始まったり教師が知識や技能を教え込んだりするのではなく、児童が自ら考え、探求する活動する中での気づきや理解したことから学ぶ学習のことである。その学習を実現するために、児童が学習に対する必要感や目的意識を持ち、見通しをもってそれぞれの実態に応じた個別最適な学びや協働的な学びを実現することが必要であると考ええる。

これまで本校は、児童が学習の目的を意識できる単元構成や言語活動の設定をすることで、教師主体ではなく児童主体の授業の実現を目指してきた。しかし、実際の学習において、児童主体の授業を実現するための単元構成や言語活動の設定を工夫したにも拘わらず、単元のねらいを追求していく過程において、教師主体の授業になってしまっている事例が散見された。

児童に学習に対する必要感や目的意識をもたせるためには、教師が主体とならず、ファシリテーターの役割を果たす必要がある。それを実現するためには、自身が主体となって学習を進めていくという児童の学習に対する意識の変容や、教師が主体とならないようにするための発問や展開の工夫が必要となる。また、児童が見通しをもって学習に取り組めるようにするためには、適切なモデルの提示や学習の目的の設定が必要となる。それらを実現することで、「子ども主体の探求的な学び」の実現を目指していきたいと考える。

4 令和6年度の研究の重点

本校では、平成27年度より国語科の研究を進めており、令和2年度からの2年間、千葉市教育委員会の研究指定を受け、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善と、学力層に対する手立てを工夫し、確かな学力を身に付けさせるための授業改善を行った。そこから、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには児童に自己の考えの形成を促す手立てが必要となることや、児童が主体的に学習に取り組むために必要な基礎学力を定着させることが必要となることが明らかになっている。

それを受けて、今年度は小学校学習指導要領（平成29年度告示）における『主体的・対話的で深い学び』を実践し、「自ら考え、行動できる力」を身に付けさせることを目指し、これまでに本校が積み重ねてきた実践の成果と課題を基に、実際の授業で個別最適な学びや協働的な学びを実現していくことで、教師と児童の学習に対するマインドセットを変容させていくことに重きを置いていきたいと考える。

また、個別最適な学び・協働的な学びを実現する手立てとして、前期と後期に1回ずつの単元内自由進度学習の導入を推奨する。発達段階に応じて、児童が学習の「方法」「相手」「時間」「課題」を選択・決定することのできる場を設けることで、児童の主体性の発揮を喚起し、「自ら考え、行動する力」を身に付けることへとつなげていきたいと考える。

5 視点について

視点 1 自ら考え、行動できる力を身に付けさせるための指導の工夫

【自ら考え、行動できる力を育むための手立て】

○学級(学年)の実態の正確な把握

その学級(学年)の実態を正確に把握することで、児童に必要な力を明確化する。

- ・全国学力・学習状況調査や千葉県標準学力検査、事前の実態調査の結果を踏まえて実態の把握をする。そして、把握した実態を基に学年・学級経営案を設定し、学年・学級経営を行っていく。
- ・上位(A評価)中位(B評価)下位(C評価)の基準の明確化、学年全体での基準の共有。
- ・上位・中位・下位の分布を分析することでの学級の実態を正確な把握。
- ・漠然とした教師の感覚ではなく、それまでの児童の学習履歴を基にした実態把握をすることで、児童に必要な力や躓いている点を明らかにする。

○年間を通じた授業に対する意識の変革

教師と児童双方の授業に対する意識を変えることで、「子ども主体の探求的な学び」の実現を目指す。

- ・授業は「教えるもの」「与えるもの」ではなく、「子どもに気付かせ、学ばせるもの」ということを教師が意識した上での実践を積み重ねることにより、児童が自ら考える習慣の定着を図る。
- ・授業は「教わるもの」「与えられるもの」ではなく、「自ら考え、学びを獲得するもの」ということを児童が意識できるように、年間を通じた継続的な指導を行う。

○ギガタブの日常的な活用

個別最適な学びを進める中で、その学びが孤立した学びにならないようにギガタブを活用した交流や共有を適宜行う。また、学習だけにとどまらず、係活動や委員会活動等でも活用することで、ICT機器の活用能力の向上を図る。

- ・共有アプリの活用(例) ポジショニング オクリンク等

○年間の学習や特別活動を通じた共有の意味や必要感の醸成

年間を通じて、情報や考えを共有する場を教師主導で用意するのではなく、児童が必要だと感じたタイミングで共有の場を設定するようにする。教師は、児童が共有を必要だと感じられるように行事や特別活動をファシリテートする。

- ・国語科の学習で学んだことを生かして委員会活動の話し合いを行う。
- ・学級で課題が見つかった時にそのままにせず、学級会を開くように児童に促す。

○安心して情報を共有することのできる人間関係づくり

- ・学級レクの充実
- ・席替えの頻度を増やす→多様な児童とかかわりをもつ機会を作る
- ・失敗することを肯定的に捉えられる教師からの声かけ(間違い≠失敗)
- ・思いやりのある人間関係づくり(お互いのためになる行動を推奨、奉仕活動等)

○学年・学級における児童の自治的活動の推奨

- ・学級の環境をよりよくするための係活動
- ・児童が自発的に企画し、活動する会社活動
- ・活動が効果的であったかを振り返り、よりよくして次に生かすことの積み重ね。

視点2 「子ども主体の探求的な学び」を実現するための授業改善

【「主体的・対話的で深い学び」へと導くための単元を通しての手立て】

○単元内自由進度学習の実践

児童が学習の「方法」「相手」「時間」「課題」を選択・決定し、自らの力で学習を進めていく場を設定する。

- ・ギガタブを使うか、ノートを使うかを児童が根拠をもって選択する。
- ・考えを共有する相手を児童が決める。
- ・話し合いのグループ編成の希望をとり、それを基に教師がグループ編成を行う。
- ・学習の目的達成に何時間かかるかを児童が考え、学習計画を立てる。
- ・教科書教材から児童が自身の解決すべき課題を設定する。

○適切なモデルの提示と学習計画の設定

当該単元で実践する活動を教師自身が実践し、その反省を基に考えた適切なモデルを提示する。そして、その活動を実践するためには何が必要なのかを子どもと共に考え、学習計画を設定することで、子どもが単元の見通しをもって意欲的に学習に取り組めるようにする。

○対話的な学びの工夫

対話的な学びを設定することにより、子どもが多様な思いや考え方に触れ、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

- ・対話を意識した授業・単元構成の設定
- ・3つの対話(自己、作品、他者)を設定した授業・単元の構築
- ・共有する視点・課題を明確にした交流(テーマ設定、何について、どのように話すのか等)
- ・共有する形態や場の工夫(人数や立場、時間配分、学習過程における位置付け等)

○単元を通しての、子どもの学習活動の適切な評価

子どもの学習活動を適切に評価することによって、子どもが自己の成長を実感し、その後の学習への主体性を高める。また、評価によってわかった自己の改善点を、その後の学習の課題とすることで、主体的に学習に取り組むことができるようにする。

- ・曖昧な評価を避けるために、事前に評価規準を明確にし、ルーブリックを教師と子どもが共有する。
(目標に到達しているかどうかを見取るための子どものパフォーマンス指標を明確にする。)

- ・パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価の弾力的な運用。

(例)相手を納得させる文章を書くために、相手に応じた事例を挙げることを理解した。

→理解したことを生かして提案文を書く。(それを教師が評価)

- ・3つの観点の本質を捉えた評価。

知識・技能→単に学んだことがそのまま言えるだけではなく、それを敷衍して他の現象にも適用できるようになっているかどうかを評価する。

思考力・判断力・表現力等→単に学校知の中だけで活用できるものではなく、将来の予測が困難な社会の中でも、未来を切り拓いていくために必要な思考力・判断力・表現力として身に付いているかどうかで評価する。

主体的に学習に取り組む態度→自己調整が「適切に行われているか」を評価するものではなく、自らの学習を調整しようとしているかどうかという意思的側面を評価する。また、この観点だけを単独で評価することのないようにする。

【「子ども主体の探求的な学び」を実現するための手立て】

○児童の主体性に支えられた学習の目的や単元計画の設定

学習の目的を教師から与えるのではなく、児童が問題意識をもって話し合った言葉の中などから学習の目的を設定する。

- ・単元計画シートの活用

(例) 学びのレシピ

- ・教科横断的な学習の編成

(例) 社会科の新聞づくりと国語の「書くこと」の学習の連動

○教師の発問の精査

児童の主体性を喚起するため、教師の発問は必要最低限にとどめ、児童の発言や気付きなどを基に授業を構成していく。

- ・授業を録画し、その記録を基に教師の説明や発問を客観的に捉えることで、授業改善へとつなげる。
- ・事前に発問計画を作成し、部会等で検討を行う。
- ・「教師が教えたいことを子どもが学びたいことに転化する」

発問の工夫によって、思考を深めるだけでなく、子どもの意欲を喚起する。一人でも多くの子どもを学習に参加させることを目指す。

→「直接問う」「直接的に導く発問」から「間接的に導く発問へ」

○児童の主体性を支える基礎学力の定着

語彙や漢字、単語の意味や文章構成など国語科の学習における基礎学力を定着させ、それをいかすことによって、自己の学習課題を適切に設定できるようにする。

- ・朝自習による反復学習
- ・教師による読み聞かせ
- ・家庭学習の方法を指導・定着

○身に付けさせたい力の明確化

「活動あって学びなし」の授業にならないために、当該単元において児童に身に付けさせたい力を明確にする。

- ・児童に身に付けさせたい力を教師が明確にもつための、過去の学習履歴とその結果の分析。

- ・児童が自身の学習を振り返り、自分に必要な力の自覚を促す発問の工夫。

○探求的な学びに導くための学習活動の場の設定

- 子どもが自ら探求したくなるような学習課題の設定や、それに基づいた学習活動の場を設定する。
- ・子どもが探求的な学びを実現しようとする中で、必要となる資料や本を予測し、事前に用意する。
- ・教師から与える学習課題ではなく、子どもの実生活と関連させた学習課題を設定する。

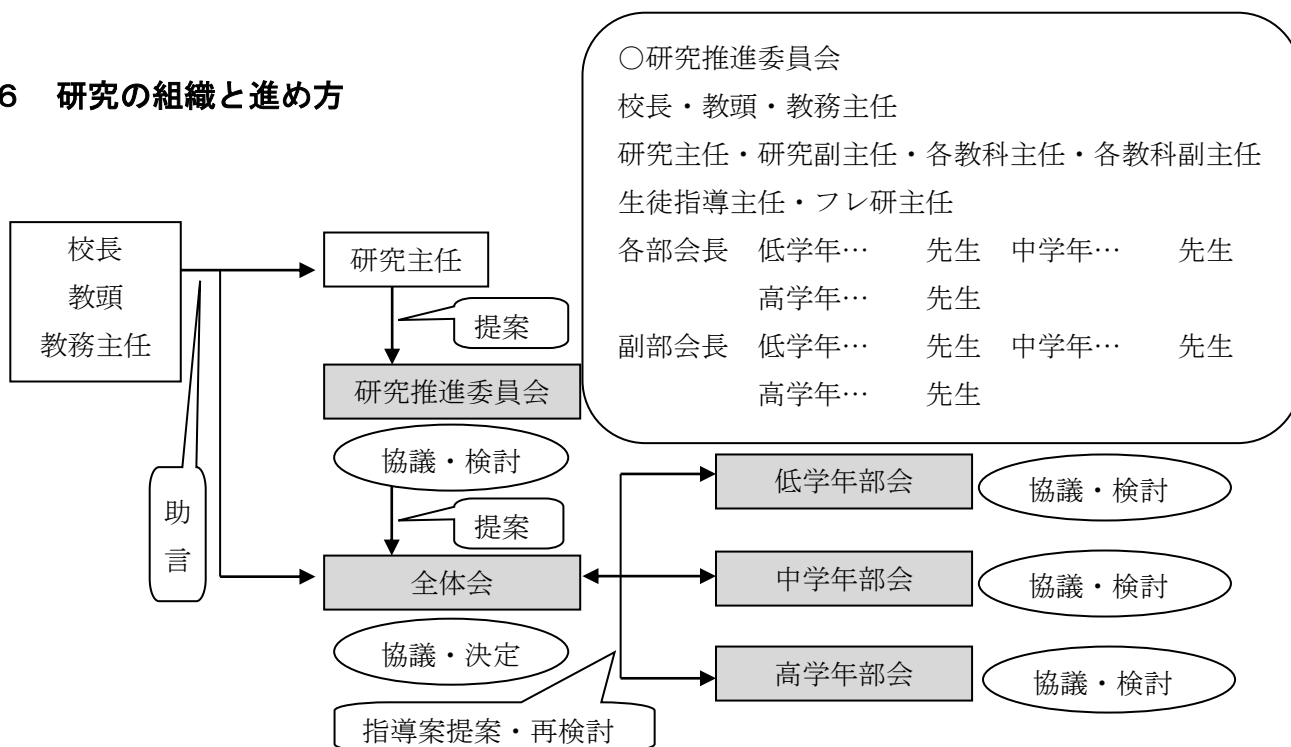
○子ども自身が、身に付いた力を実感するための振り返りの充実

- ・自分が学習した結果を分析すること
(例) 自分自身の作品を読み、事例を適切に取り上げて書いたか分析する振り返り。
- ・自分の学習したプロセスについて分析すること
(例) 報告文を書いた際に本の調べ方がよかった、インターネットの使い方が悪かったなど、学んだ結果だけではなく、そのプロセス自体も振り返ること。
- ・自己の感情を分析すること
(例) 手紙を書く言語活動に取り組み、相手から返事が返ってきて感じた気持ちを振り返る。
- ・自己の変化を分析すること
(例) 物語を読んで最初に考えていたことと、最後に考えていたことを記録し、その変化について振り返る
- ・上手いかなかったことを肯定的に捉え、次の活動にいかしていくこと
(例) 学習計画通りにいなかったことを消して無かったことにするのではなく、修正して次にいかしていけるようにする

○教材提示の工夫

- ・まず子どもが教材に触れ、そこから自身の課題の把握へとつなげる。
(例) 2桁の割り算の答えをどうやって導き出すか、今まで学習したことを使ってやってみよう
→うまくいかない、どうして?→学習の目的へとつなげる。
- ・既習事項を振り返り、子どもが身に付けたい力を確立してから教材を提示する。
(例) 筆者の主張を捉えるためには文章の構成(初め・中・終わり)を捉え、「初め」か「終わり」に主張があることが多いことが分かった。
→主張に対する自分の考えをもつためには?
→主張だけでなく、なぜその主張に至ったのかの理由を理解する必要がある。
→教材提示へとつなげる。

6 研究の組織と進め方



○校長先生（全体助言） 教頭先生（全体助言） 教務主任（全体助言）

○研究主任・研究副主任・教科主任・教科副主任（全部会助言）

○にじの子学級担任 先生（低）・ 先生（中）

○専科 先生（中）・ 先生（高）・ 先生（高）・ 先生（低）

（１）各学年の実態に応じて選択した教科の実践を通して、研究主題にせまるよう授業改善を図る。

（２）各部会では相互に協力し合い、部会長を中心として、研究実践の日常化や推進を図る。

（３）各部会は、部会長を中心に、研究の方向性、視点等を検討し、授業のあり方を追求する。

（４）講師招聘の授業展開は立候補制とする。紀要には全学年の実践を掲載する。

（５）基本的に全学級担任が授業実践を行う。（例 学年で精案１本時案４）

※全体会終了後に講師招聘授業をされる先生（立候補）と各部会の部会長・副部会長を決めていただきます。人数は各部会の状況に応じて調整してください。

※部会長と副部会長は同学年で務めることのないようにお願いします。

※専科の先生方の授業実践也大歓迎です。

【授業までの流れ】

①授業者は単元に入る１週間前までに指導案を作成・印刷・配付

②展開部分もしくは単元計画をデジタルかアナログにて共有

③展開部分もしくは単元計画に先生方から意見・質問を自由に書き込んでもらう。

④頂いた意見・質問の中から授業者が気になるものを選び出す。

⑤その意見・質問を書いた先生に直接話を伺いに行く。

⑥この手順を踏み、授業者が納得したものを基にして指導案を修正し、単元に入る前日までに完成した指導案を配付。

⑦授業実践を参観（おおすすめの時間を指導案に明記）

⑧参観していただいた先生方で協議会を実施。（協議会のタイミングは部会で検討）

※講師招聘授業についても同様の流れとする。(ただし、外部に出すもののため、研究主任・副主任による確認。管理職の先生方からのご指導をいただく。)

管理職の先生方や教務主任の先生は各部会にできるだけご参加いただき、助言をいただきたいと考える。教科主任・副主任、研究主任等の部会参加については、各部会へ流動的に参加していただくものとし、可能な限りで教科主任・副主任の協力を仰いでいきたいと考える。

【指導案の形式について】

- ・提案授業の趣旨（単元について）
- ・単元の目標
- ・本時の目標
- ・指導計画もしくは本時の展開
- ・研究の視点について

以上を最低限押さえ、各教科主任の指導を仰ぐ。

【協議会について】

昨年度と同様に、指導案検討よりも協議会の充実を図る。

- ・授業者が司会（学年の実態に応じて最適化可）
- ・授業実践の検討してほしいポイントを授業者や学年で設定

【先生方の研究への主体的な参画を目指して】

○ゲリラ型授業研究会

本時の目標と展開（A4 1枚）のみを用意し、有志の方々に参観していただく授業。実施する際は研究主任までお声掛けください。

○ショート授業研修会

朝学習の取り組み、漢字指導、朝の会・帰りの時間の指導、清掃指導、学級会の指導等の参観を通して他学年の実践の理解を深めたり、研修を深めたりする。

※各学年で公開できる実践の内容・時間を伺うので、検討をお願いします。

【精案作成者】

低学年部会	中学年部会	高学年部会
先生	先生	先生
先生	先生	先生

7 研究日程

月	日	曜	会議名	内容	場所	備考・その他
4	4	木	研究推進委員会	今年度の研究の方向性についての説明 内容の検討	校長室	
	25	木	全体会	今年度の研究について カリキュラム・マネジメント① 研究体制・研究日程の検討 指導案作成にあたって共通理解事項の確認 指導案執筆者、講師招聘授業の決定	職員室	
5	30	火	部会	学年・学級の実態の把握 実態調査の内容の検討 授業研究教科・単元についての検討・決定	職員室	
6	27	木	全体会	【校内研修】 単元内自由進度学習について	職員室	講師（予定） 美浜打瀬小 教頭 先生
7	10	水	研究推進委員会	各授業研究単元の確認 部会の進捗状況の確認 今年度の紀要の書式についての検討	校長室	
7	16	火	全体会 ↓ 部会	校内職員による専門研修①（ 先生） 授業研究単元で行う活動及び単元構成の検討 単元構成（単元構想）の検討	職員室 ↓ 各部会	
9	26	木	全体会	カリキュラム・マネジメント②	職員室	
10	31	月	全体会	校内職員による専門研修②（教務主任）	職員室	
11	28	木	授業研究	授業研究（ 年 組） 学級	教室	講師
12	19	木	全体会 ↓ 部会	今年度の研究・実践の振り返り	職員室 ↓ 各部会	
1	10	金	部会	研究紀要の部会相互点検	部会	
2	7	金	全体会 研究推進委員会	研究紀要の全体相互点検 次年度の研究の方向性について	職員室 校長室	
2	27	木	全体会	来年度の研究の方向性について カリキュラム・マネジメント③	職員室	
3	19	水	研究推進委員会	来年度に向けて（研究概要提案）	校長室	

※この予定以外にゲリラ型授業研究会、ショート授業研究会が適宜入ります。